校長研修だより６６

期末テスト終了「ほめる」と「認める」

２０２２・７・１　重枝 一郎

「自尊感情」とは

心理学用語の訳語として定着した概念である。一般的には「自己肯定感」「自己存在感」「自己効力感」等と同じような意味合いである。「自尊感情」を英訳の Self-esteem を辞書で引くと，自尊心，プライド，うぬぼれ等がある。つまり，「自尊感情」とは自分に対する自己評価が中心であり，「自尊感情」を高めようとして過大評価することや自己評価と他者評価のギャップが大きい場合に自信を失うことがある。

一方「自己有用感」とは

「自己有用感」は，他の人の役に立った，喜んでもらえた等，相手の存在なしには感じられない感情になる。最終的には自己評価になるかもしれないが，他者との関係性において強く影響されるという点がポイントになる。つまり，「自己有用感」を獲得すると「自尊感情」につながることは当然であるが，「自尊感情」の獲得は必ずしも「自己有用感」の獲得にはつながらないということである。

学校という場で

一昔前によく聞かれた話で，「自分に自信がもてず，人間関係に不安を感じている生徒が多い。生徒の自尊感情を高めることが必要である」と。しかし，私たち学校での日常を考えると，規範意識の重要性も強調しているところであり，集団・社会との関係，自分と他者との関係において肯定的である場合，それが自己に対する評価に結び付くので，「自尊感情」という言葉より「自己有用感」という言葉の方がしっくりくる。

人が集まる学校という場所において，他者からの評価は大きく影響しなくては何のために人が集まっているのかということになる。単純にほめて育てるというより，認められて育てるという状況が大切である。他者の存在を前提にしない自己評価は社会性に結びついているとは言えないからである。つまり「自己有用感」に裏付けされた「自尊感情」という考え方が大切になる。実は，私は学校教育の中では「自己有用感」という言葉しか使わないようにしている。

「自己有用感」を高めるために

よく，ほめることの大切さが言われる。ところがこれは教師の勝手な基準でほめている場合がよくあり，時に，生徒は，ほめられたいことと違って，うれしくないという感情をもつこともある。また，表面的にほめられても伝わらないこともある。中学生年代になると「ほめられたい」と「認められたい」とは分化してくる。だから，私は「ほめる」と「認める」には大きな違いがあると思っている。「ほめる」では「自尊感情」を高めることはできても，「自己有用感」は高めることはできない。他者なしでも成立する「自尊感情」と異なり，「自己有用感」は他者の存在や他者との交流を前提にして生ま

れる。だからこそ，社会性の基礎となって，他者に対する配慮や集団に対する責任感，きまりを守って行動しようとする自覚等にもつながっていく。また，「自己有用感」は他者との関りから生徒が感じ取るものだから，教師が直接与えることができない。だから，集団づくりが重要であり，自分が価値ある存在であると実感できるような授業や様々な活動をつくっていくことが大切である。

それは「大切なひとり」につながる

年度初めの校長研修で話したが，本校のシンボルワードである「大切なひとり」を本年度のシンボルワードにした。この「大切なひとり」とは，「生徒の自己肯定感・自己有用感を高め，存在価値観をもたせることである」と説明した。ワクワクする学校をつくることで，一人一人のワクワクをもっと広げてくれると思う。その一つの取組が，昨年度から始めた「学校長表彰」である。生徒が学校外でも，**凛として**思いやりのある行動をした場合に表彰するものである。そのうち，生徒会の生活委員長あたりが，**「凛ちゃんをさがせ」**という，仲間のいいところ探しをしてみたらと思う。きっと学校全体がワクワクする。学校をワクワクさせるのが生徒会の仕事である。**そして，「凛として」や「大切なひとり」というシンボルワードを，いつでも，どこでも，生徒とともに私たちも言葉にしていく。**

期末テストに向けて生徒は目標をつくっていたと思う。また，クラスや学年での取組もあったと思う。個と集団の有用感を高めるチャンスである。７月の目標づくりにもつなげていく。HR や学年集会等を活用しよう。